

BOOK REVIEW

冷静な議論のための基礎資料

日韓友好の「のどに刺さったとげ」となっている竹島(韓国名・独島)ドクト(Ⅱ)の領有権問題について両国の歴史資料を網羅して紹介し、冷静な議論を両国民に呼び掛けた本だ。

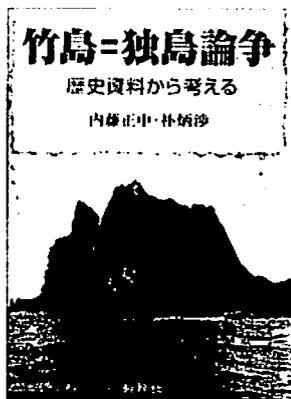
正直に言って竹島については、日韓併合五年前の一九〇五年、日本領として島根県に編入されたという程度の知識しかなかった。帰属論争についても、何せ誰も住めない無人島のこと、古来の日韓の濃密な海上交通史を考えれば、どちらの側にもそれなりの言い分がぎょうさんあるのだろうと、はすに構えてきた。

しかし、本書を読んで不明を恥じた。地誌のたぐいは好きな方だが、竹島と対で論じられる鬱陵(うつりょう)島が朝鮮史に組み込まれていく過程や、鬱陵島の帰属をめぐる江戸時代の日朝交渉、日本海海戦を控えた竹島編入の経緯など、生き生きとした歴史が何より面白いのだ。まず知らなかったことに島名の揺れがある。江戸時代に日本が竹島と呼んでいたのは巨大な竹が生育する鬱陵島であり、そこへの渡海中継地だった現在の竹島は松島と呼ばれていた。一本も生えぬ島だが、竹島との対で名付けられたという。

幕府が鬱陵島渡海を禁止すると、松島という名前はいっしか忘れられ、明治にはフランス船が付けた「リアンクール島」やそれがなまった「りやんこ島」という名前が使われていた。編入時に竹島となつてしまったのは、地元島根県でも記憶があいまいになっていったためらしい。

同島への認識が希薄だったという事情

「竹島」独島論争



新幹社刊 定価2625円

内藤正中、林炳涉著

は韓国側も同様だ。朝鮮朝は倭寇対策として鬱陵島の島民を本土に移住させる「空島政策」を取っており、鬱陵島の先にもう一つの島があるという認識の形成は立ち遅れた。

その二は、それが本書のエッセンスでもあるのだが、日本政府は江戸、明治の二度にわたり、竹島を領土外とする決定

をしていたという事実である。

江戸幕府は一六二〇年代ごろ、鳥取藩下の米子の町人に竹島(鬱陵島のこと)への渡海を許可した。しかし、同九三、九三両年に竹島で日朝双方の漁民が遭遇。これにより生じた「竹島一件」と呼ばれる同島の帰属をめぐる交渉の過程で、幕府は鳥取藩に対し「竹島はいつから因幡伯耆両州に付属したのか」「ほかにも付属する島はあるか」質問。「竹島、松島は両州に付属しない」との回答を受けて、以後、竹島渡海を禁止する。

「竹島外一島ヲ版図外ト定ム」という太政官指令を発したのは、八十七年。明治新政府の領土確定作業の中で、島根県からの照会を受けての決定である。

以上を読むと、「日本の固有領土」という外務省の主張はあまり旗色が良くない。だからといって直ちに韓国領となるわけではないが、「東アジアの環境協力のモデルとしての自然保護区設定」(芹田健太郎氏)など、何らかの打開策を検討する必要はないのか。周辺三カ国すべてと領土問題を抱えるという状態は、戦略的にも得策とは言えない気がする。

(森田 修 解説委員)